

魚住 和泉式部娘の供養塔

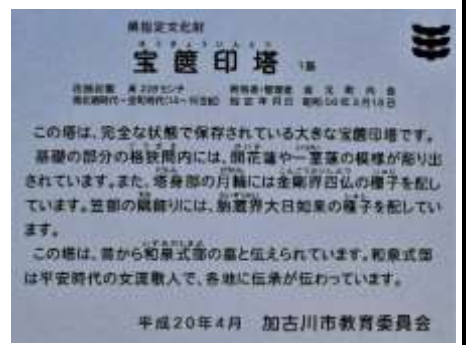
JR魚住駅から東に約400m、住宅地の中に平安時代の歌人和泉式部の娘、小式部内侍の供養塔があります。近くの遍照寺には「小式部祈りの松」という伝説が伝えられています。

「今はむかし、伝説紀行」(日新信用金庫発行)によると、いまから千年近く昔の一条天皇のころ、天皇が大切にしていた立派な松が、理由もなく枯れはじめた。母の和泉式部に続いて歌人として知られるようになった小式部内侍に、天皇は「この松が栄えるように」と祝いの歌を作ることを命じた。小式部内侍は心を込めて、「理りや枯ではいかに姫小まつ 千代をは君にゆつるとおもへは」とうたった。何時までも続く美しさをあなたに譲ろうと思っていたのに、姫小松よ、枯れてしまっは何にもならない、という意味である。不思議なことに忽ち松は元気を取り戻したという。

しかし、小式部内侍は、万寿2年(1025)に産後の肥立ちが悪く、病に伏し、亡くなる寸前に「いかにせん行くへきかたもおもほへす親に先たつ道を知らねば」と先立つ不幸を歌に託した。歌人として絶頂期にあった和泉式部にとっても最大の衝撃であった。悲しみに暮れる和泉式部は、播磨の書写山圓教寺(姫路市)に性空上人を訪ねて、娘の供養をし、その帰り道、上人の弟子であった明石・長坂寺の寂心上人のもとに滞在、一心に法華経を詠んだという。「経文には、子供を失った親が50年後に対面したことが記されている。私にも法華経の功德を下さい」と、ひたすら念ずると、香の煙の中から小式部内侍が浮かび上がって、再会することが出来たというのである。この不思議な出来事を天皇に話し、小式部内侍が蘇らせた松をもらって長坂寺のそばに植えた。寂心上人も追善供養のために五輪塔を建てた。人々は五輪塔を小式部内侍塚、松を小式部内侍祈りの松と呼んで大切にしていた。播磨では、姫路の書写山を中心に相生、加古川などに和泉式部と小式部内侍の伝説が数多く残されており、和泉式部が播磨に来たのではないかといわれるが、史実的にははっきりとしない。長坂寺は、聖徳太子が創建したといわれ、かつては28の塔頭(たちちゆう)寺院もっていた、遍照寺もその一つで「魚住の太子さん」で親しまれている。



旧西国街道の通る加古川市の坂元には、和泉式部の墓と伝わる県指定文化財の「宝篋印塔」(ほうきょういんとう)があります。また、明石や加古川には、鎌倉時代や室町時代に供養のために作られた多くの古い五輪塔や宝篋印塔が残されており、人々の信仰の広がりやうかがわれます。



明石市魚住町清水の西福寺「石造五輪塔」(県指定) 貞和2年(1346)銘

明石川河口付近の善楽寺「平清盛の供養塔」(市指定)

【参考文献等】 『明石の文化財』(2019. 3 明石市の文化遺産総合活用推進事業実行委員会)
 『今はむかし、伝説紀行』(2004.7 日新信用金庫)
 『明石の石造遺品を歩く 石に刻む』(1982. 6 明石仏教青年会)等